

I Samuel 9:22-27, 10:1-25, 11:1-15, 12:1-14

(Iサムエル記9:22)「しかし、サムエルはサウルとその若い者を広間に連れて入り、三十人ほどの招かれた者の上座に彼らを着かせた。」

見たところ、サムエルは少人数のリーダーたちを集めておいたようです。

(Iサムエル記9:23-27)「サムエルが料理人に、『取っておくようにと言って渡しておいた分を下さい』と言うと、料理人は、ももとその上の部分とを取り出し、それをサウルの前に置いた。そこでサムエルは言った。『あなたの前に置かれたのは取っておいたものです。お食べなさい。私が客を招いたからと民に言って、この時のため、あなたに取っておいたのです。』その日、サウルはサムエルといっしょに食事をした。それから彼らは高き所から町に下って来た。サムエルはサウルと屋上で話をした。朝早く、夜が明けかかると、サムエルは屋上のサウルを呼んで言った。『起きてください。お送りしましょう。』サウルは起きて、サムエルとふたりで外に出た。彼らは、町はずれに下って来ていた。サムエルはサウルに言った。『この若い者に、私たちより先に行くように言ってください。若い者が先に行ったら、あなたは、ここにしばらくとどまってください。神のことばをお聞かせしますから。』」

彼らは、正式な儀礼を行っています。サウルはその日サムエルとともに食事をし、そして会合を持ちました。

王として油注がれたサウル

(Iサムエル記10:1)「サムエルは油のつぼを取ってサウルの頭にそそぎ、彼に口づけして言った。『【主】が、ご自身のものである民の君主として、あなたに油をそそがれたではありませんか。』」

サムエルはサウルに王として油をそそぎました。そののち、彼に口づけしていますが、これはおそらくサウルへの彼の個人的な愛情を示したものでしょう。

(Iサムエル記10:2)「『あなたが、きょう、私のもとを離れて行くとき、ベニヤミンの領内のツェルツァフにあるラケルの墓のそばで、ふたりの人に会いましょう。そのふたりはあなたに、「あなたが捜して歩いておられるあの雌ろばは見つかりました。ところで、あなたの父上は、雌ろばのことなどあきらめて、息子のために、どうしたらよかろうと言って、あなたがたのことを心配しておられます」と言うでしょう。』」

キシュから見れば、サウルは迷子になってしまっています。でも、サウルは真剣な務めに関わっているのです。サムエルはサウルをラケルの墓の近くで油そそいで王としました。ラケルの墓は、ベツレヘムのそばのベニヤミンの領地内にあります。

(Iサムエル記10:5)「その後、ペリシテ人の守備隊のいる神のギブアに着きます。あなたがその町に入るとき、琴、タンバリン、笛、立琴を鳴らす者を先頭に、高き所から降りて来る預言者の一団に出会います。彼らは預言をしています、」

サウルは家に帰る途中で、この一団に会います。

(Iサムエル記10:6)「【主】の霊があなたの上に激しく下ると、あなたも彼らといっしょに預言して、あなたは新しい人に変えられます。」

ここで再び疑問が起こります。サウルは回心したのでしょうか？この節は彼の回心の証拠でしょうか？たしかにこれは最終的な証拠ではありません。

私は彼が回心していないと思います。もし私がサウルに対して偏見を持っているように聞こえるなら、その理由をお話しましょう。彼に関してここまで見てきたことのせいではなく、これから出て来ることによって、サウルが純粋ではなかったこと、そして確かに純粋に回心してはいなかったと思わせるのです。

「でも、神さまの御霊がサウルの上を下って、彼は変えられたでしょう」と言う人が必ずいるでしょう。そうです。でも、そこには“新しい人に”とは書かれていません。(訳注: 日本語では「新しい人に変えられます」という文章は、英語ではつまり、「別の人に変えられる」と訳されています。)バラムにも、神さまの御霊が下ったではありませんか？そして彼が回心したと言う証拠はどこにもありません。ユダはどうでしょう？キリストは12弟子を遣わされ、彼らのすべてが奇蹟を行ったと書かれています。ユダも奇蹟を行ったのでしょうか？も

ちろん行いました。ユダは回心していたと言われますか？ですから、サウルについて最終的な決断をするのは待ちましょう。私はもうすでに決断をしてしまったようですが。

(Iサムエル記10:9)「サウルがサムエルをあとにして去って行ったとき、神はサウルの心を変えて新しくされた。こうして、これらすべてのしるしは、その日に起こった。」(訳注:ここでも、英語では God gave him another heart「神は彼に別の心を与えられた」となっており、「新しい」ということばは入っていません。)

サウルがサムエルをあとにして去ったとき、サムエルは彼が歩いていくのを見ながら、「ああ、彼は立派な若者だ」と言ったのではないかと思います。でも、預言者さえも間違えることはあるのです。預言者ナタンがダビデに神さまに家を建てなさい、と言ったとき、彼は間違っていました。神さまが介入され、ナタンは自分のことばを正さなければなりませんでした。サウルについて、サムエルは間違っていました。サムエルがこのサウルを見たとき、彼は大きく、がっしりした、見栄えの良い若者でした。彼は、どのフットボール・チームに入っても、立派にやれたことでしょう。でも、彼は全く王の器ではなかったのです。

(Iサムエル記10:10-11)「彼らがそこ、ギブアに着くと、なんと、預言者の一団が彼に出会い、神の霊が彼の上に激しく下った。それで彼も彼らの間で預言を始めた。以前からサウルを知っている者みなが、彼が預言者たちといっしょに預言しているのを見た。民は互いに言った、『キシユの息子は、いったいどうしたことか。サウルもまた、預言者のひとりなのか。』」

神さまの御霊がサウルの上に下り、彼は預言しました。前から彼を知っていた者たちすべては、彼に何かが起こったのだと分かりました。彼らは訊ねました。

「サウルもまた、預言者のひとりなのか？」

神さまはサウルにチャンスを与えておられたのです。神さまは彼にすべての物を与えられました。それでも彼は失敗したのです。

(Iサムエル10:16)「サウルはおじに言った、『雌ろばは見つかっていると、はっきり私たちに知らせてくれました。』サウルは、サムエルが語った王位のことについては、おじに話さなかった。」

王位のことについては、彼は黙っていました。

(Iサムエル10:17-19)「サムエルはミツパで、民を【主】のもとに呼び集め、イスラエル人に言った。『イスラエルの神、【主】はこう仰せられる。『わたしはイスラエルをエジプトから連れ上り、あなたがたを、エジプトの手と、あなたがたをしいたげていたすべての王国の手から、救い出した。』ところで、あなたがたはきょう、すべてのわざわいと苦しみからあなたがたを救ってくださる、あなたがたの神を退けて、「いや、私たちの上に王を立ててください」と言った。今、あなたがたは、部族ごとに、分団ごとに、【主】の前に出なさい。』」

イスラエルの子らが王を要求し、サウルを王として認めたとき、それは彼らが神さまに背を向けていることを意味しました。彼らがサウルを王として受け入れたことは、彼らが神さまを拒否したことを意味する、ということに注目する必要があります。

(Iサムエル10:21-22)「それでベニヤミンの部族を、その氏族ごとに近づけたところ、マテリの氏族が取り分けられ、そしてキシユの子サウルが取り分けられた。そこで人々はサウルを捜したが、見つからなかった。それで人々がまた、【主】に、『あの人はもう、ここに来ているのですか』と尋ねた。【主】は、『見よ。彼は荷物の間に隠れている』と言われた。」

サムエルが群衆にサウルを彼らの王として紹介するときが来たとき、彼はサウルを見つけることができませんでした。このとても大きな若者サウルは、まるで小さな子どものように振る舞っていました。彼は逃げて隠れ、人々は彼を捜し出して連れて来なければなりませんでした。ここでも、私の考えは、彼のこの行動はにせの謙遜の証拠だと思うのです。もう油は彼の上にそそがれたのですから、もし王になって神さまに仕える機会が与えられたのなら、彼は公に進み出て王のように振る舞うべきなのです。

(Iサムエル記10:24)「サムエルは民のすべてに言った。『見よ。【主】がお選びになったこの人を。民のうちだれも、この人に並ぶ者はいない。』民はみな、喜び叫んで、『王さま。ばんざい』と言った。」

このときに初めて、「王さま。ばんざい」(訳注:英語では“God save the king”)ということばが発せられたのです。ご存知のように、現在もイギリスでは同じことばが使われています。

(Iサムエル記10:25)「サムエルは民に王の責任を告げ、それを文書にしるして【主】の前に納めた。こうしてサムエルは民をみな、それぞれ自分の家へ帰した。」
「サムエルは民に王の責任を告げ、それを文書にしるし」ました。これを根拠として、私たちはIサムエル記の最初の部分をサムエルが書いたと信じているのです。

11章、12章

テーマ:アモン人に対するサウルの勝利。サムエルからサウルに権威を譲渡する。

アモン人に対するサウルの勝利

前の章で、そのときには十分な根拠がないように見えるのに、私はサウル王についてかなり手厳しいことを言いました。私には、サウルが純粹ではないという強い疑いがあっただけでした。出だしは順調でしたが、私は彼が良い俳優にはなれたと思いますが、よい王にはなれなかったと感じたのです。

(Iサムエル記11:1-3)「その後、アモン人ナハシュが上って来て、ヤベシュ・ギルアデに対して陣を敷いた。ヤベシュの人々はみな、ナハシュに言った。『私たちと契約を結んでください。そうすれば、私たちはあなたに仕えましょう。』そこでアモン人ナハシュは彼らに言った。『次の条件で契約を結ぼう。おまえたちみな、右の目をえぐり取ることだ。それをもって全イスラエルにそしりを負わせよう。』ヤベシュの長老たちは彼に言った。『七日の猶予を与えてください。イスラエルの国中に使者を送りたいのです。もし、私たちを救う者がいなければ、あなたに降伏します。』」

これは、ヤベシュの人々に対するナハシュからのとても強い、醜い要求でした。彼らには解放が必要でした。

(Iサムエル記11:4-7)「使者たちはサウルのギブアに来て、このことをその民の耳に入れた。民はみな、声をあげて泣いた。そこへ、サウルが牛を追って畑から帰って来た。サウルは言った。『民が泣いているが、どうしたのですか。』そこで、みな、ヤベシュの人々のことを彼に話した。サウルがこれらのことを聞いたとき、神の霊がサウルの上に激しく下った。それで彼の怒りは激しく燃え上がった。彼は一くびきの牛を取り、これを切り分け、それを使者に託してイスラエルの国中に送り、『サウルとサムエルとに従って出て来ない者の牛は、このようにされる』と言わせた。民は【主】を恐れて、いっせいに出来た。」

サウルが、どのように自分をサムエルと同一視しているかを見てください。特にこのときには、サウルの名前はまだそれだけでは知られていなかったのだと思います。でも、サウルが、自分の名前をサムエルの名前に連結して、民に出て来るように求めたとき、人々はやって来ました。彼らが来た理由には、ふたつの大きな恐れがありました。彼らはサウルを恐れ、また、アモン人が自分たちにどんなことをするかを恐れました。

(Iサムエル記11:11)「翌日、サウルは民を三組に分け、夜明けの見張りの時、陣営に突入し、昼までアモン人を打った。残された者もいたが、散って行って、ふたりの者が共に残ることはなかった。」

サウルは民を三組に分けました。そしてイスラエル人はアモン人の陣営に突入して彼らを殺し、ふたりの者がともに残ることがないほどに彼らを散らしました。ひとりずつのアモン人が、自分ひとりで逃げていきました。

(Iサムエル記11:12)「そのとき、民はサムエルに言った。『サウルがわれわれを治めるのか、などと言ったのはだれでしたか。その者たちを引き渡してください。彼らを殺します。』」

イスラエル人のうちのある者たちは、サウルを自分たちの王にするという考えに反対しました。サムエルは、民全体がサウルを支持してひとつになるまで、反対を無視しました。アモン人の扱いに関するサウルのリーダーシップは、反対者たちを静めました。

(Iサムエル記11:13-15)「しかしサウルは言った。『きょうは人を殺してはならない。きょう、【主】がイスラエルを救ってくださったのだから。』それからサムエルは民に言った。『さあ、われわれはギルガルへ行って、そこで王権を創設する宣言をしよう。』民はみなギルガルへ行き、ギルガルで、【主】の前に、サウルを王とした。彼らはそこで【主】の前に和解のいけにえをささげ、サウルとイスラエルのすべての者が、そこで大いに喜んだ。」

今、イスラエルのすべてがサウルを王として受け入れます。

あなたは次のように言うておられるかもしれません。

「さあ、先生。あなたが間違っていたことがお分かりでしょう。あなたはサウル王に対して偏見を持っていましたが、ほら、彼は成功しているじゃないですか。」

確かに、彼は偉大な王のように出発しました。でも、先を読んでいきましょう。彼の物語がここで終わっていないのは、実に残念なことです。

サムエルからサウルに権威を譲渡する

12章は、サムエルの最後のことばで始まります。

(Iサムエル12:1)「サムエルはすべてのイスラエル人に言った。『見よ。あなたがたが私に言ったことを、私はことごとく聞き入れ、あなたがたの上にひとりの王を立てた。』」

これはサムエルの最後のスピーチです。彼はすばらしい人でした。今、サウルが彼のあとを継ぎます。イスラエルは、神さまよりも王を選びましたが、もし彼らが従うなら、神さまはまだ民を祝福してくださいでしょう。それは明らかです。サウルが王であり、神さまは彼にすべての機会を与えられるはずでした。

(Iサムエル12:2)「『今、見なさい。王はあなたがたの先に立って歩んでいる。この私は年をとり、髪も白くなった。それに私の息子たちは、あなたがたとともにいるようになった。私は若い時から今日まで、あなたがたの先に立って歩んだ。』」

サムエルは会見の天幕で育てられました。彼は、自分の人生を「金魚鉢」の中で過ごしました。彼はいつでも公に見えるところにいたのです。おそらくサムエルが過ごしたほどの公的な人生を送った人は、だれもないことでしょう。私たちの時代、多くの場合に人が公の人生に入っていくと、人々はその人を受け入れます。そして突然、誰かがその人の暗い過去について見つけ出し、そして英雄は地に落ちます。サムエルは、そのようなことはありませんでした。彼は、子どものころに母親に連れられて会見の天幕にきました。彼は、全生涯を人々の前で生きました。そして彼はこの優しい父親の悲しい調べを付け加えます。

「私の息子たちは、あなたがたとともにいるようになった。」ことばを換えれば、「彼らを受け入れてはどうだ？」ということです。サムエルは彼らを所定の位置につけようとしたましたが、神さまは彼らを受け入れることはなさいません。彼らは、神さまにとって、我慢できない者たちでした。

(Iサムエル記12:3)「『さあ、今、【主】の前、油そそがれた者の前で、私を訴えなさい。私はだれかの牛を取っただろうか。だれかのろばを取っただろうか。だれかを苦しめ、だれかを迫害しただろうか。だれかの手からわいろを取って自分の目をくらましただろうか。もしそうなら、私はあなたがたにお返しする。』」

これは、公共の目に何年もさらされてきた士師である人物が口にするのには、なかなかすごいステートメントです。彼には、金持ちになるチャンスはいっぱいありましたが、でもサムエルはその誘惑に屈服することはありませんでした。サムエルは、神さまのみことばの中のすばらしい人物たちのひとりです。父親としては失敗ではありましたが。多くの公人は彼のようにです。多くの人気のあるクリスチャンリーダーたちの子供たちは失敗しています。理解に苦しみますが、人間の種族は、過去何世紀も、何千年も、そのようにやって来ました。

サムエルは、もし自分が言ったようなことをどんな人に対してでもしたことがあるなら、それをお返しする、と言いました。サムエルの決定のひとつにむっとさせられた人々がいたとしたら、進み出て「あなたは私に対して、公平ではありませんでしたよ」と言ったかもしれません。でも、誰も進み出てきませんでした。

(Iサムエル12:5)「そこでサムエルは彼らに言った。『あなたがたが私の手に何も見いださなかったことについては、きょう、あなたがたの間で【主】が証人であり、主に油そそがれた者が証人である。』すると彼らは言った。『その方が証人です。』」

サムエルの生涯は、公の査察に耐えうるものでした。公の意見の熱いスポットライトにも耐えられました。彼は本当に神の人でした。

サムエルは、続けてイスラエルの歴史を語ります。神さまに偉大な者とされた人々の多くが、この方法を使いました。モーセも、ヨシュアも、ギデオンもこの方法を使いました。そして今、サムエルも使っています。新約聖書の中では、サンヘドリンの前に出たステパノが、やはりイスラエルの歴史を語りました。サムエルは、自分の民に、彼らに対する神さまの誠実さとあわれみとを思い起こさせています。彼らの背教が労役につながり、彼らが苦悩の中で主に叫んだとき、主は親切にその叫びを聞き、解放者を送られました。サムエルは、ミツパで言ったと同じように、
「ここまで【主】が私たちを助けてくださった」
と言っているのです。

そのあとサムエルは彼らの現在の状況へと移ります。

(Iサムエル12:13)「今、見なさい。あなたがたが選び、あなたがたが求めた王を見なさい。【主】はあなたがたの上に王を置かれた。」

サムエルは、サウルが人々の選択であるということをとてまはっきりさせています。多くの人々は、大多数の意見、大ぜいの人々の選択は、神さまの声であると信じています。聖書はそのような考え方に反対します。普通、神さまのみこころを決定するのには、少数派のほうが近いのです。人々がサウルを求めました。神さまはダビデを選ばれました。神さまの選択は、何と違うことでしょう。

(Iサムエル記12:14)「『もし、あなたがたが【主】を恐れ、主に仕え、主の御声に聞き従い、【主】の命令に逆らわず、また、あなたがたも、あなたがたを治める王も、あなたがたの神、【主】のあとに従うなら、それで良い。』」

サウルが人々の選択だからということだけで神さまは彼を拒むことはなさいません。神さまはサウルにチャンスをお与えになるのです。